



Data	2022-50
監督・脚本：ジョン・ウー	
制作：ツイ・ハーク	
出演：チョウ・ユンファ／ティ・ロン／レスリー・チャン／エミリー・チュウ	

👁️👁️ みどころ

ジョン・ウーとツイ・ハーク、そして、チョウ・ユンファ、ティ・ロン、レスリー・チャン。そんな男たちが勢揃いした、“香港ノワールの金字塔”が35年ぶりに復活！

1960～70年代の日活・東映のヤクザ路線をアレンジした香港映画の全盛時代は、民主化運動が弾圧され、一国二制度が崩壊した今は終わってしまったから、なおさら本作は懐かしい。

マッチ棒をくわえたニヒルな笑い、ド派手な2丁拳銃のぶっ放し等々の名シーンの数々は、今見ても実に楽しい。これからも4Kリマスター版で、かつての名作を次々と鑑賞したいものだ。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■ “香港ノワールの金字塔” が35年ぶりに復活！ ■□■

1950～60年代の日活は石原裕次郎、小林旭という若き2大スターの登場によって日活アクション映画が花開き、和田浩二、高橋英樹、渡哲也らがそれに続いた。また1960年代の東映は、鶴田浩二、高倉健演ずるヤクザ映画が大ヒットし、以降、藤純子、菅原文太、松方弘樹らがそれに続いた。これは、戦後復興をいち早く成し遂げ、1960年の日米安保条約締結によって、軽武装で経済成長に集中できた日本のあっと驚く神ワザだ。毛沢東率いる中国（中華人民共和国）は1950年代の“大躍進政策”の失敗後、1966年からの“文化大革命”でも大混乱に陥ったから映画どころではなく、チェン・カイコーの『黄色い大地』（84年）（『シネマ5』63頁）、チャン・イーモウの『紅いコリヤン』（87年）（『シネマ5』72頁）が世界に発表されたのは1980年代半ばだった。

他方、イギリスの統治下にあった香港では、1970年代のブルース・リーとジャッキー・チェンの登場、さらに1982年の『少林寺』におけるジェット・リーの登場によっ

て香港武術映画が花開いた。さらに、香港では1986年に“香港ノワールの金字塔”たる本作が登場。「香港は武術アクション映画のみにあらず！」と主張して、新たな歴史を刻んでいくことに。そんな名作が今、35年ぶりに復活！

■□■ジョン・ウーとツイ・ハークに注目！香港と台北が登場■□■

本作の監督・脚本はジョン・ウー、そして製作はツイ・ハークだ。ジョン・ウーは後にハリウッドで大活躍したが、1980年代の彼は、香港の映画界で独自の路線を貫き通したため、台湾に追われて不遇の生活を送っていたらしい。そこで、友人のツイ・ハークが「もう一度、香港で映画を作ろう」と台湾に出向いて、ジョン・ウーを香港映画界に復帰させたことが本作製作のきっかけらしい。

そんなエピソードを裏付けるかのように、本作冒頭は、香港のヤクザ「三合会」の幹部であるホー（ティ・ロン）とその親友のマーク（チョウ・ユンファ）が、台湾に渡って大きな取引に臨むストーリーになる。しかし、その取引の舞台はどこかへん？そう思っていると・・・。

日本の野球界では、かつて“松坂世代”が注目されたが、今や佐々木朗希を頂点とする“朗希世代”が注目的。女子ゴルフ界では、とうの昔にブラチナ世代が席卷している。それと同じように、1980年代の香港の映画界は製作陣も俳優陣もまさに黄金時代。本作では、一方ではマッチ棒を口にくわえてニヒルに笑い、他方ではド派手に2丁拳銃をぶっ放すチョウ・ユンファのカッコ良さと、ティ・ロンの渋い魅力がメインだが、若き日のレスリー・チャンのキュートな魅力にも注目！

■□■最後の取引で逮捕！その間シャバでは？■□■

ホーは闘病中の父親と学生である弟キット（レスリー・チャン）の面倒を見ていたが、キットが警察官を希望しているため、ヤクザの足を洗うよう父から懇願され、それを承諾。したがって、台湾での取引はホー最後の大事な仕事だったが、誰かの密告のため、警察の手入れを受け、絶体絶命の状態に。そこでやむなくホーは、部下のシン（レイ・チーホン）を逃がして自分は自首し服役することに。

他方、その間に父親は陰謀によって殺され、そのことで兄が三合会の幹部だと知ったキットは、以後ハッキリ兄を敵とみなして警察官の道に専心していくことに。また、マークは報復のため乗り込んだレストランで敵を皆殺しにしたものの、足を負傷するというアクシデントに見舞われることに。

あれだけの大事件で逮捕されたヤクザの幹部であるホーがわずか3年で出所してくる脚本にはビックリだが、それはさておき、3年間の刑務所生活を終えたホーが出所後に直面したシャバの現実とは？

■□■リーダーは誰に？ホーは？マークは？キットは？■□■

男は黙って己の義務を果たして刑務所へ。しかし、刑期を終えてシャバに戻ってみると、その現実とは？1960～70年代の日活や東映の（純正）ヤクザ映画はそんなストーリー

が多かったが、それを引き継いだ1980年代の“香港ノワール”はまさにそれ。わずか3年の間に三合会はどう変わってしまったの？自首してくれたホーのおかげでシンは幹部になれたのだから、出所してきたホーに対してそれなりの礼を尽くすべきだが、さて現実には？また、左足の自由が利かなくなったマークは今どんな仕事を？

今や三合会の中にホーの居場所がないのは当然だし、ホーも警官になった弟キットのためにもそれを望んでいなかったが、そんなホーに安定した勤務先はあるの？大阪でお好み焼きチェーン店『千房』を経営している中井政嗣氏は刑務所から出所してきた、いわゆる“前科者”を雇用する会社として有名だが、ホーにもユー（シー・イエズ）を社長とする、そんなタクシー会社があったからラッキー！かつてのヤクザの幹部だって、足を洗ってカタギになれば単なる一人の市民。ホーはそう主張したいわけだが、それは世間はもとより、警察でも通用しないらしい。そのため、いくら成績が良くても身内にヤクザの幹部がいるという理由で出世できない上、現在進行中のシンの捜査からも外されてしまったキットの不満は爆発するばかりだ。恋人のジャッキー（エミリー・チュウ）がいくらキットをなだめても、兄弟間の確執と対立は収まりそうもない。私が中学時代に見た、高橋英樹主演の『男の紋章』シリーズでは、ヤクザの親分の跡目を継がず、医者道を選びながらも、結局、組の親分に復帰する姿が描かれていたが、さて本作では？

本作では、3年ぶりに再会したホーに対して、マークが「俺は3年間待ったんだ！もう一度2人で巻き返そう！」と絶叫する名シーンが中盤のみどころだが、それに対するホーの答えは？さらに、酒を飲んでいるマークとホーの席にやってきたシンが「2人を幹部として迎えるから、組に戻ってくれ」と勧誘するシーンも登場するが、それに対するホーの答えは？マークの答えは？さらに、これを見張っていたキットはホーに詰め寄り罵声を浴びせたが、マークが「なぜ兄を許してやらないのか！」とキットに迫るのも名シーンだ。

ことほど左様に、それぞれの立場が異なる男たちの渡世は大変だから、本作の『男たちの挽歌』というタイトルは実にピッタリ！

■□■クライマックスで浮上する男たちの挽歌をタップリと！■□■

高倉健主演の『唐獅子牡丹』シリーズも、高橋英樹主演の『男の紋章』シリーズも、ストーリー仕立ては単純。しかし、香港ノワール最高峰たる本作のクライマックスは少し複雑だし、ド派手さではハリウッド並の迫力だから、それに注目！

ホーが勤めるタクシー会社を痛めつけても、マークをトコトンいたぶっても、ホーは三合会への復帰を拒否！その頑固さは見事だが、それにしびれを切らしたシンは、一方で嘘の情報を警察の捜査陣から外れたキットに流し、他方で、ある取引を！そんな中、“もはや我慢もこれまで！”となったマークは再び2丁拳銃を手に、ある企てを！

そんな最後の取引の舞台は、日活映画では“波止場”と決まっていたが、本作もそれを踏襲し（？）、大量の火薬を使用しながら、“これぞ香港ノワール”と納得させる一大アクション劇を繰り広げていくので、それに注目！ド派手な銃撃戦の中で銃弾はホーにも当た

ったはずだが、それはそれ。ジョン・ウー監督が描くアクション活劇は、そんな傷はものともせず、すぐに復活させてくること間違いないはずだ。そんなワクワク、ドキドキの大活劇を楽しみつつ、マカロニ・ウエスタン風の“孤独感”とは異質の、香港流「男たちの挽歌」をしっかり味わいたい。

2022（令和4）年5月6日記